



Title	An Analysis of Metaphors and Context-induced Effects in the U.S. Inaugural Addresses (1960-2021)
Author(s)	友繁, 有輝
Citation	大阪大学, 2024, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/98640
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名(友繁有輝)	
論文題名	An Analysis of Metaphors and Context-induced Effects in the U.S. Inaugural Addresses (1960-2021) (米国大統領の就任演説 (1960-2021) におけるメタファーとコンテキスト誘発効果の分析)
論文内容の要旨	

本論文は、米国大統領の1期目の就任演説 (1960-2021) を対象に認知言語学で主流の概念メタファー理論 (CMT) (Lakoff & Johnson, 1980) を応用し、コンテキストから生じるメタファーの役割について検証した。理論的枠組みとしては、CMTの見解を保持しつつも、Charteris-Black (2004, 2005, 2014) や Du Bois (2007) のディスコースを対象とした分析の知見を援用することで、大統領のメタファーは、イメージ構築やスタンスに寄与することを主張するものである。第一章は、本論の目的及び1960年代から1期目の演説を分析する意義を端的に説明し、第二章から論じるポイントを以下の6つの観点に絞った。

- ① 就任演説のスキーマ的特徴とメタファーの関係性
- ② 就任演説のスキーマ的特徴と頻度の高い起点領域
- ③ 一般英語とジャンル別の英語の相違による慣習性
- ④ 一般的な就任演説の特徴に基づくコンテキストによる効果と大統領のスタンス
- ⑤ メタファー関連語彙 (MRW/ sub-MRW) と際立つドメインの部位 (SPD)
- ⑥ メタファー産出と歴史的背景の関係性

第二章では①~③の問題を取り扱った。Campbell and Jamieson (1990) が指摘しているように就任演説は儀式的な演説に分類され、その慣習性として、(A) 統一と未来志向的な言葉遣い (B) 大統領権限の限界に関する言及 (C) 時間を越境した伝統的価値、が挙げられる。この共通事項を軸に、社会的・歴史的背景、個人の性格・政治思想、党派性といった相違点が認められ、各演説のテーマに影響を与えていている。共通事項の (A) から、建国時を始発点とし、未来へと続く表現・語彙が演説内では使用され、それが頻度の高いJOURNEYのメタファーへと繋がる。就任演説の中で、間テキスト性や聖書・神への言及が広範に用いられているのは、(B) と (C) によるものである。これらを前提とすると、大統領はどのようなレトリックを使用してテーマに対するスタンスを表しているのか、という疑問が生じる。レトリックの中でもメタファーを観察する必要性は、(A)~(C) に基づく道のスキーマが想定され、過去・現在・未来に対する意識が言語表現に反映されているからである。

このように、就任演説は、政治言説の中の儀式的な演説であり、ジャンル固有の言葉遣いが確認される。そこで本論文は、CMTと就任演説で慣例的なメタファー (CMIA) を区別した。CMIAによるメタファー観では、思考の背景にある抽象的なメカニズムではなく、意味の構築に照準を合わせる。この違いによって、CMTで議論されているメタファーの存在論的・認識論的対応関係も政治言説に合わせて考察した。それに伴い、CMTで取り扱われているメタファーの慣習性の高い語彙を意図的ではないメタファー (supraindividual level) (Kövecses, 2010; Reijnierse et al., 2017; Steen, 2017) と潜在的に意図性があるメタファー (Reijnierse et al., 2017; Steen, 2017) に分けた。MRWが近接する文脈に影響されず、単独かつ慣習度が高く、スキーマのレベルに近ければ、それらの語彙は意図的ではないメタファーに割り振られる。一方で、1つの起点領域に対して、近接するコンテキストの中で、イメージ構築に貢献しているMRW・sub-MRWが見つかれば、潜在的に意図的なメタファーである。起点領域 (X) に対して起点領域 (Y) を喚起する語彙が使用されていたとしても、文脈の効果として (X) のイメージ構築としての機能が認められる場合は、sub-MRWとして付与している。これは従来見過ごされていたコンテキストを考慮した対応関係を、ドメインから想起される推論・コンテキストに基づくMRW・sub-MRWからの対応関係という3つの観点から見直したものである。メタファー分析は、1) テクストを読む 2) ATLAS.tiを用いて、メタファーのコードを付与 (コロケーションや頻度を確認する時にはAntConcを使用)

- 3) コンテクストから導き出される対応関係を考察 4) 効果やスタンスを考察 5) 社会的な背景の考察、という5つの手順によって実施した。さらに詳細化した手順は次の通りである。
- ・慣習性の高い語彙であったとしても、演説全体を通してある起点領域に属する可能性がある場合、MRWに分類。
 - ・比喩用法かどうか判断が困難な場合、以下の辞書を用いて、基本義とコンテクスト内の意味の乖離を調べた。*(The New Oxford American Dictionary (NOAD), The Oxford English Dictionary (OED))*. SPDを確認する際には、*Suggested Upper Merged Ontology (SUMO)* (Ahrens & Jiang, 2020)を用いた。
 - ・MRWが直接的に使用され、かつコンテクストに応じたドメイン間のマッピングがある場合、それを潜在的に意図性があるメタファーに分類。
 - ・MRWとsub-MRWに分類し、それらが起点領域に対してより効果を強めている場合は、より意図性があると判断。
 - ・<始発から目的達成までのプロセス>が、コンテクストの情報に照らし合わせるとどのような対応関係になっているのかをA(目標領域) is B(起点領域)に分けて考察。

上記の手順に基づき、第三章から第六章にかけて、④と⑤を中心に年代順に議論を展開した。使用されている起点領域は、主にJOURNEY・FIGHT・NATURAL PHENOMENA・PERSON・BUILDING・ARTIFACTSである。起点領域に対応する目標領域は、コンテクストに応じて変化する。だが、前述のようにCMIAは、道のスキーマや event structure metaphor (Lakoff & Johnson, 1999) を基礎に置き、JOURNEYのメタファーを軸に、始発点から目標地点に至る過程が様々なメタファーによって表されている。第三章は、1960年代の演説(ジョン・F・ケネディ、リンדון・ジョンソン、そしてリチャード・ニクソン)を対象にメタファーがどのようにテーマに沿って、コンテクストの中で効果を持つのかを論じた。ケネディの演説で中心的なメタファーは、PROMOTION OF HUMAN RIGHTS IS A JOURNEYであり、共産主義に対する強い姿勢を見せながら、核兵器の脅威を認識させ、現実的な平和を追求していくスタンスを構築している。ジョンソンは、PROMOTION OF JUSTICE, LIBERTY, UNION BASED ON THE AMERICAN COVENANT IS A JOURNEYに沿って、ベトナム戦争・公民権運動などを背景に「偉大な社会」を推進する重要性を強調している。ニクソンの旅(冒険)のメタファー(PROMOTION OF GREATNESS IS A JOURNEY)による「偉大さ」は平和の推進を指しており、相互扶助の精神性を追求することを示し、その精神性は、建物のメタファー(GREATNESS IS A BUILDING)によって前景化され、平和を目指す大統領像の構築に寄与している。

第四章は、1970年代の演説(ジェラルド・フォード、ジミー・カーター)を対象にメタファーの効果について考察した。フォードの演説では、メタファーを構成するMRWの数は少ないものの、PROMOTION OF PEACE IS A JOURNEY/ PROCESS OF BECOMING A PRESIDENT IS A JOURNEYから、ニクソンのスタンスを継承しながら、国内の統一を促すメタファーが使用されている。特にウォーターゲートを国「傷」として捉えるメタファー(A NATION IS A PERSON)、そして信頼回復のメタファー(IDEAS ARE ARTIFACTS)がフォードのスタンスを端的に表明している。カーターは、ケネディと同じPROMOTION OF HUMAN RIGHTS IS A JOURNEYを用いて、人間性、慈悲、正義、自由、平和を人権の中に含め、核兵器根絶を目指す大統領像を作り出している。

第五章は、1980・90年代の演説(ロナルド・レーガン、ジョージ・H・W・ブッシュ、ビル・クリントン)を対象にメタファーとその効果を検証した。レーガンは、60年代・70年代とは異なるメタファー(ECONOMIC DEVELOPMENT IS A JOURNEY)によって、経済の発展の重要性及び経済状況の悪化の原因をこれまでの政府のあり方においている。ジョージ・H・W・ブッシュの演説は、PROMOTION OF FREEDOM AND DEMOCRACY IS A JOURNEYを中心に、SOCIAL CIRCUMSTANCES ARE NATURAL PHENOMENAとDEMOCRACY IS A BUILDINGのメタファーのネットワークが認められ、新たな風、つまり共産主義との戦いの集結を示していることを指摘した。クリントンは、AMERICAN RENEWAL IS A JOURNEYによって、新たな世界秩序を意識した「米国の刷新」を推進し、AMERICAN RENEWAL IS A NATURAL PHENOMENAとネットワークを構成して、新旧の対比を浮き彫りにしながら、演説の主題に対するスタンスを強化している。

第六章は、2000年代の演説(ジョージ・W・ブッシュ、バラク・オバマ、ドナルド・トランプ、ジョー・バイデン)を対象とした。ブッシュのPROMOTION OF DEMOCRATIC FAITH IS A JOURNEYは、HISTORY IS AN ARTIFACTと絡み合い、米国の物語を推進している。これは、ジョージ・H・W・ブッシュのHISTORY IS AN ARTIFACTと無関係ではなく、両者とも米国の民主主義・自由を広めていくことの倫理的妥当性をメタファーによって強化している。オバマは、PROMOTION OF GREATNESS IS A JOURNEYとSOCIAL CIRCUMSTANCES ARE NATURAL PHENOMENAのメタファーのネットワークによって、先人から続く米国の旅を意識し、その価値に重きを置くスタンスを貫いている。トランプは、PROMOTION OF AMERICAN GREATNESS IS A JOURNEYを軸にアメリカ・ファーストを推進し、移民・既成権力の批判を通して、そして国の白人中心社会を取り戻そうとする姿勢を見せており、バイデンのメタファー、PROMOTION OF UNITY AND DEMOCRACY IS A JOURNEY/FIGHTは、前トランプ政権の批判を兼ね備え、分断を煽るレトリックを打ち消す効果があることを示した。特に戦いのメタファーでは、ケネディの戦いの対象と比較した際に、多岐にわたる国内問題に焦点が移行していることを明らかにした。

以上の議論を踏まえ、6.6.1節では、ケネディ、ジョンソン、ジョージ・H・W・ブッシュ、クリントン、ジョージ・W・ブッシュ、オバマ、バイデンの演説から、JOURNEYのメタファーがNATURAL PHENOMENAとのメタファーのネットワークによって、目標領域・テーマに対するスタンスが強化されることを示した。6.7節では、演説の中核となる部分（不变性）について触れ、大統領に共通する神への言及は、伝統を踏襲した要素とスタンス強化のレトリックとしての機能があることを述べた。不变性の中には、米国の自由・民主主義を最適な政治システムとする考え方や例外主義があることを示した。

第七章は、不变性の中の変化の部分に焦点を当て、同じ起点領域の重なる時代背景及び相違点について論じた。7.1節では、60年代に使用されている共通の起点領域のJOURNEY, FIGHT, NATURAL PHENOMENA, PERSON, BUILDINGに着眼した。7.2節は70年代に用いられているJOURNEY, PERSONIFICATION, ARTIFACTS, NATURAL PHENOMENAを中心に、そして7.3節は、80年代・90年代における共通の起点領域、JOURNEY, FIGHT, NATURAL PHENOMENA, PERSON (BODY, FAMILY), ARTIFACTSと社会背景について論じた。7.4節は、2000年代の共通の起点領域としてJOURNEY, FIGHT, BUILDINGについて取り扱った。まとめとして、7.5節はテーマ別（冷戦、共産主義、平和、貧困・経済、自由、民主主義）に各大統領のメタファーについてどのような繋がりがあるのかを論じた。第八章は、結論として以下の事柄を述べた。すべてのメタファーは独立して存在するのではなく、道のスキーマ、event structure metaphor、間テクスト性に基づいて、テーマに共鳴するネットワークを作り出している。旅と戦いのメタファーが頻出する理由は、就任演説のスキーマ的構造と米国の歴史を通しての文字通りの旅と戦いの関与が挙げられる。JOURNEYとNATURAL PHENOMENAが組み合わされる傾向として、1) 特に光の象徴的意味から、善と悪、「us」と「them」という二分法による議論の正当化 2) スタンス構築に関与する起点領域のイメージ活性化が挙げられる。例え同じ起点領域が使用されたとしても、領域を構成するMRW、sub-MRW、SPDによって異なるスタンスを探ることができる。社会的な背景は部分的に重なり合いながら、目標領域が変化し、創造的なメタファーが使用される場合がある。もしMRWやsub-MRWが、問題になっている領域に言及して、1つのイメージを作ることに貢献するために使われるなら、それは潜在的に意図性があるとみなされる。潜在的に意図的なメタファーによって、大統領の不变性と不变性の中の変化に対するスタンスが明らかとなる。メタファーを観察することで、「支持層や国民に大統領自身がどのような姿を見せたいのか・どのようなイメージを国民に抱いて欲しいのか」かがわかる。そして「なぜそのように国民に見られたいのか」という問いには、大統領自身の個性に加え、社会的・政治的・歴史的背景が影響を及ぼしていると結論づけられる。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (友繁有輝)		
	(職)	氏 名
論文審査担当者	主査	教授 大森 文子
	副査	教授 井元 秀剛
	副査	講師 中嶌 浩貴
	副査	名誉教授 小口 一郎

論文審査の結果の要旨

友繁有輝氏の博士学位論文 *An Analysis of Metaphors and Context-induced Effects in the U.S. Inaugural Addresses (1960-2021)* は、1960年以降の米国大統領の第1期の就任演説を研究対象とし、メタファーとコンテクスト誘発効果について分析するものである。認知言語学における概念メタファー理論 (Lakoff and Johnson, 1980その他) に基づきつつ、Charteris-Black (2004, 2005, 2014) や Du Bois (2007) のディスコース分析の知見を援用し、大統領のメタファーがイメージ構築やスタンスに寄与することを主張する。本論文は8章より構成されている。各章の概要を以下に記す。

第1章では、本論の目的および1960年代からの1期目の演説を分析する意義を説明し、1) 就任演説の一般的な特徴や演説のテーマに適合すべく用いられるメタファーはどのようなもので、メタファーによる文脈誘発効果は大統領のスタンスとどのように関連しているか、2) 社会背景や政治状況がメタファーの産出やスタンスの取り方にどのような影響を与えるのか、という2つの研究課題を設定した。

第2章では、先行研究を概観し、研究方法を記した。代表的な先行研究によれば、就任演説は儀式的な演説であり、統一と未来志向的な言葉遣い、大統領権限の限界への言及、時間を超越した伝統的価値への言及などの共通特徴があり、これらを軸として、社会的・歴史的背景、個人の性格・政治思想、党派性といった相違点が認められ、各演説のテーマに影響を与えている。また建国時を始発点とし、未来へと続く表現・語彙が使用され、それが高頻度の旅のメタファーの使用へと繋がっている。加えて、大統領権限の限界や時間を超越した伝統的価値に言及するために、間テクスト性が見られ、そこでは聖書・神への言及が広範に用いられていることも指摘されている。こうした特徴を前提として本論文では、大統領が用いるレトリックとその文脈誘発効果を解明すべく、一般的な概念メタファーとは区別して「就任演説における慣習的なメタファー」を定義・選別し、その上で「意図的でないメタファー」と「潜在的に意図性があるメタファー」に分類した。メタファー分析の実施手順は以下の通りである：1) テクストの精読、2) ATLAS.tiを用いたメタファーへのコード付与 (コロケーションや頻度を確認する時にはAntConcを使用)、3) メタファーにおける対応関係の考察、4) コンテクスト誘発効果やスタンスの考察、5) 社会的な背景の考察。

近年のアメリカ大統領を取り巻く政治的状況は、おおよそ10年代 (decade) ごとに局面が大きく変化している。そこで第3章から第6章にかけては、10年ごとの年代の区切りを意識しながら就任演説を考察した。用いられたメタファーの主たる起点領域は〈旅〉〈戦い〉〈自然現象〉〈人〉〈建築〉〈人工物〉である。起点領域に対応する目標領域はコンテクストに応じて変化する。第3章は、1960年代の就任演説 (ジョン・F・ケネディ、リンドン・ジョンソン、リチャード・ニクソン) を対象に、メタファーが表すテーマとそのコンテクスト誘発効果について考察した。ケネディは、人権の推進を旅と捉えるメタファーを中心とし、戦いのメタファーにより共産主義に対する強い姿勢を見せ、核兵器の脅威を認識させ、現実的な方法論で国際平和を追求するスタンスを構築している。ジョンソンは、正義・自由・団結を旅と捉えるメタファーを用い、ベトナム戦争・公民権運動などを背景に「偉大な社会」を推進することの重要性を強調している。ニクソンの旅のメタファーは平和の推進を表し、相互扶助の精神性の追求を示している。その精神性はさらに建築のメタファーによって前景化され、平和を目指す大統領像の構築に寄与している。

第4章は、1970年代の就任演説 (ジエラルド・フォード、ジミー・カーター) を対象に考察した。フォードは、平和の推進を旅と捉えるメタファー、大統領就任プロセスを旅と捉えるメタファーを用い、ニクソンのスタンスを継承しながら、国内の統一を促している。特に、ウォーターゲートを国の傷と捉える擬人化メタファーや真実を統治のための接着剤と捉えるメタファー等で信頼回復を訴える表現がフォードのスタンスを表明している。カーターは、

人権と関連させながら、人間性、慈悲、正義、自由、平和に言及しつつ、ケネディと同様に人権の推進を旅と捉えるメタファーを用いて、核兵器根絶を目指す大統領像を作り出している。

第5章は、1980・90年代の就任演説（ロナルド・レーガン、ジョージ・H・W・ブッシュ、ビル・クリントン）を対象にメタファーとその効果を検証した。レーガンは、経済発展を旅と捉えるメタファーを用いて、経済の発展の重要性を述べている。ジョージ・H・W・ブッシュは、自由と民主主義の推進を旅と捉えるメタファーを中心に、社会情勢を自然現象と捉えるメタファー、民主主義を建築物と捉えるメタファーとのネットワークを構成している。80年代のこの2人の大統領は、冷戦期後期の政治経済状況に即したメタフォリカルな戦略を展開したが、冷戦終結を受けた90年代のクリントンは、旅のメタファーによって新たな世界秩序を意識した「米国の刷新」を推進し、米国の刷新を自然現象と捉えるメタファーとネットワークを構成して自らのスタンスを強化している。

第6章は、2000年代以降の演説（ジョージ・W・ブッシュ、バラク・オバマ、ドナルド・トランプ、ジョー・バイデン）を対象とした。ブッシュが用いた、民主主義の信奉の推進を旅と捉えるメタファーは、歴史を人工物と捉えるメタファーと絡み合い、アメリカの「物語」を推進し、アメリカ的な民主主義と自由のイデオロギーを広めていくことの倫理的妥当性を強化している。オバマは、「偉しさ」の推進を旅と捉えるメタファーと社会情勢の変遷を旅と捉えるメタファーのネットワークにより、先人から続く米国の旅を意識し、その価値を重視するスタンスを貫いている。トランプは、「アメリカの偉しさ」を旅と捉えるメタファーを軸にアメリカ・ファーストを推進し、移民・既成権力の批判を展開しながら、白人中心社会を取り戻そうとする姿勢を見せている。バイデンの、団結と民主主義の推進を旅や戦いの観点から捉えるメタファーは、前政権への批判を兼ね備え、トランプの分断を煽るレトリックを打ち消す効果がある。バイデンの戦いのメタファーでは、同じメタファーを多用したケネディと比較すると、国内問題に焦点が移行していることが特徴的である。以上の議論を踏まえ、第6章末尾では、1960年代以降の各大統領の就任演説を通観し、旅のメタファーと自然現象等のメタファーがネットワークを構築することにより目標領域・テーマに対する各大統領の強いコミットメントを示していること、それぞれの就任演説に共通する神への言及は、伝統を踏襲し、各大統領が示す政治的スタンスの正当性を強化するレトリックとしての機能をもつことを述べた。

第7章では、各年代に共通する起点領域の背後にある時代背景の変化を論じ、冷戦、共産主義、平和、貧困・経済、自由、民主主義といった政治課題を軸にした各大統領のメタファー間の繋がりを整理した。

第8章では、メタファーは独立して存在するのではなく、道のスキーマ、事象構造メタファー、間テクスト性に基づき、テーマと共に鳴るネットワークを作り出していること、旅と戦いのメタファーの頻出は演説のスキーマ構造と米国の歴史を通しての文字通りの旅と戦いの関与によるものであること、メタファーの観察により「支持層や国民に大統領自身がどのような姿（イメージ）を見せたいのか」が解明できることなどを述べ、本論文の結論とした。

以上のように、友繁氏は、過去60年間のアメリカ大統領の就任演説テクストを分析対象とし、369ページにわたる論文にまとめている。それぞれの時代の社会情勢や大統領の政治信条などを視野に入れながら、そこから生じるメタファーの意味と役割、メタファーどうしの関係性について、詳細な考察を試みた労作と評価することができる。加えて、概念メタファー理論の考え方に基づいているものの、メタファーの修辞的効果やスタンスの概念を踏まえた議論を行うことで、メタファーをより重層的な観点で捉えようとした挑戦的研究であるとも言える。一方で、審査においては次のような批判や指摘がなされた。まず、就任演説テクストの読みや分析がやや綿密さに欠け、分析の漏れやメタファーの対応関係の考察の細かい点で不備が散見される。時代特有のメタファーの存在に対する着眼も不足している。本論文が設定する「潜在的意図性のあるメタファー」と「意図的でないメタファー」の区別に恣意的なところがあり、メタファーの慣習性が段階的なものであることを指摘する先行研究への目配りが足りない。「一般的なメタファー」と「就任演説におけるメタファー」の区別の妥当性を示す根拠が足りず、この二者の関係性をどうモデル化するかは再考の余地がある。また、各大統領のメタファーの観察の列挙にとどまり、本論文の本来の目的である、演説という政治文脈においてメタファーが聞き手の心にどういう効果をもたらすか、大統領は何を目的としてある特定のメタファーを用いるのかの解明に関して説得力がやや欠けるものとなっている。さらに今後の課題として、メタファーの背景となるキリスト教文化圏独特の価値観への理解を深めること、より広く1960年代以前の歴代大統領の就任演説テクストも対象に含めること等がある。しかしながら、以上の点は本論文のさらなる発展として今後の研究が期待できる課題でもある。また本論文では、理論偏重に陥らないよう言語事実の記述を重要視している点で、経験的な議論を行おうとする姿勢が見られ、テクストの吟味を通して個々の言語表現の意義について検討するという、人文学的な特色のある研究である。本論文は大統領演説における実際に使用されたメタファー表現を研究対象とし、難しい研究テーマに果敢に取り組み、政治的テクストに対する認知言語学研究に少なからぬ貢献をしていることは間違いない、博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。